

素材・アクリラについて思うこと

1994年『ACRYLART・アクリレート別冊1994』所収

絵画は支持体とその表面を覆う被膜とで出来ています。それらについて物質的に、あるいは科学的に分析した書物は数多くあります。しかしそれらが、絵画に携わる人々の意識や精神性にまで大きく関わっていることについて興味深く書かれた本を私はあまり読んだことがありません。私たち表現者にとって油絵の具が西欧そのものを体現した素材として立ち現れてくる切迫感に比べると、それはいささか拍子抜けのする話です。

例えば、私たちはもともと非西欧世界の住人でありながら今では西欧世界のあらゆる恩恵に浴しています。普段はそのことに気づきもしないわけですが、何かの拍子に自分たちのアイデンティティーに思いを馳せる時、浮き草のように表面を漂う自分に気がつきます。油絵の具で自己表現を試みるなら、そのような自分が西欧世界で鍛えられてきた素材とどう向き合うのか考えなくてはなりません。勿論、美術そのものが西欧世界で育てられてきた制度ですから素材が何であれ避けて通れない同様の問題があるのですが、油絵の具を素材として選ぶとするなら、さらにその意味を見つめないわけにはいかないと思います。

アクリラは私にとって擬似油絵の具という感じがします。但し、余り出来のよいコピーではなく、実際の値段はともかくとして素材感としてはチープです。油絵の具より便利な点は水で処理できることで、また支持体の表面処理が容易であり、その分だけ素材を選択できることです。その他の点について絵具としては絵具としての美しさは比べるべくもなく、速乾性という利点も油絵の具に慣れている身にとっては生理的になじめない場合もあります。乾燥後のぶよぶよな表面も保管上結構困ります。そんな感想を持つ中で、あえて私がアクリラを素材として現在選択しているのは、何よりも工業生産的なチープな仕上がりを選択すべきだと感じているからです。

かつて私は油絵の具をオイルで薄く溶き、安物のローラーでペンキのようにべたべたと塗ったりしたこともありましたが、ある程度絵具の層を重ねると発色の美しさと色彩の深まりが同時に画面に訪れて困りました。それは歴史を重ねた油絵の具の素材の美しさであり、私の営為とは全く関係がなかったのです。油絵の具の凄みをあらためて実感した私は、かといってアクリラの上から鉛筆やコンテでの重ね描きもできないようなビニール質の仕上がりも不便で困っていたのですが、カラージェッソの使用によって取り敢えずその点はクリアーできました。

まだ素材としてうまく扱えているとは自分でも思っていないですが、素材をうまく扱えた時というのは表現としてある程度の結果が出てしまった時かもしれませんから、そういう意味でこれからも楽しみです。今は支持体としてのプリント生地やボール紙など試していますが、これも通過点に過ぎません。素材、というよりも支持体とその表面、被膜の関係が私の表現とどう関わっていくのか、私はアクリラの、工業生産的な無表情さの中で見つめてみたいと考えています。